



清流NEWS

〒191-8686 東京都日野市神明1-12-1 Tel 042-514-8309
発行日 1月・4月・7月・10月

Vol. 122
発行
日野市
環境共生部
緑と清流課

第9回 あさかわ写真コンクール ～しぜん・ひと・まち～

あさかわ写真コンクールは、日野市と八王子市の両市を流れる浅川を、源流から多摩川の合流点までひとつの流域として捉え、良好な水辺環境と心豊かな浅川流域のまちづくりを目指すため、浅川流域連携事業のひとつとして行っている催しです。

今年で9回目を迎えたあさかわ写真コンクールですが、今年は312作品の応募があり、それぞれに撮影者の浅川に対する思いを感じることができました。

そして、令和元年11月2日(土)には、日野市多摩平の森ふれあい館にて、表彰式が開催され、入選者の方々に賞状と副賞の授与が行われました。

表彰式では、大坪日野市長、石森八王子市長および協賛企業として参列してくださいましたカシオ計算機株式会社の長田様、コニカミノルタ株式会社の渡辺様より賞の贈呈が行われました。



大坪日野市長(左)と石森八王子市長(右)



第9回あさかわ写真コンクール表彰式記念写真

一般の部 最優秀賞



『秋、ふれあい橋の夕焼け』 設楽 誠一

中学生以下の部 最優秀賞



『晩秋の浅川』 城ヶ崎 一心

第9回 あさかわ写真コンクールの結果

□作品募集期間 令和元年5月7日～9月2日

□応募作品数 一般の部 274作品 中学生以下の部 38作品 計 312作品

一般の部	
最優秀賞	
秋、ふれあい橋の夕焼け	設楽 誠一
優秀賞	
雪に暮れゆく廿里町	大野 滋
秋の南浅川	星野 郁男
日野市長賞	
大切にしたい!子ども時代	小野 絵理
八王子市長賞	
堰の流れで涼をとる	箕箸 俊一
佳作	
晩秋の南浅川橋	池田 榮雄
いつもの春	岡田 史郎
緑に染まる川	川村 登
浅川に映る夏	佐々木陽介
水辺の生き物を追って	中西 隆
朝靄に輝く	西山 喜久
夕暮れの寄り道	古本 泰之
雪の浅川	水口 敦
春の風景	村上 逸郎
躍動	渡邊 敦子

一般の部 優秀賞



『雪に暮れゆく廿里町』 大野 滋

一般の部 優秀賞



『秋の南浅川』 星野 郁男

一般の部 日野市長賞



『大切にしたい!子ども時代』 小野 絵理

一般の部 八王子市長賞



『堰の流れで涼をとる』 箕箸 俊一

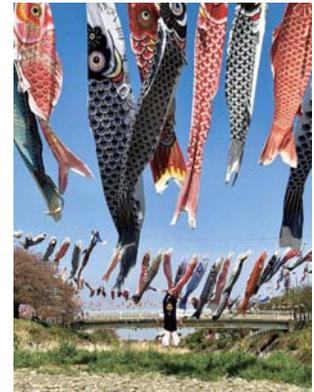
中学生以下の部	
最優秀賞	
晩秋の浅川	城ヶ崎一心
優秀賞	
流れ	石川 優太
未来へジャンプ	斉藤 優
日野市長賞	
浅川のハンター・灰鷹	松浦 航
八王子市長賞	
朝焼けの浅川	井上 美桜
佳作	
川と電車と妹と	栗埜 千洋
真夏の滝つぼ	桑原 心哉
春真っ盛り	小山 咲風
羽ばたくカモ!	篠崎 愛里
青春(あおはる)	竹板まりも
みんなのあそび場 南浅川	平田 実暉
自然のなかで	増島 美愛
浅川の春	水口 信綱
せせらぎ	望月 優吾
菜の花摘み	八木下湖雪

中学生以下の部 優秀賞



『流れ』 石川 優太

中学生以下の部 優秀賞



『未来へジャンプ』 斉藤 優

中学生以下の部 日野市長賞



『浅川のハンター・灰鷹』 松浦 航

中学生以下の部 八王子市長賞



『朝焼けの浅川』 井上 美桜

環境月間報告



例年、緑と清流課では10月を環境月間と定めています。環境月間は、様々な催しを通じて、日野市の水と緑を守るこの大切さを市民の方々知っていただくために行っています。

元号が令和となった今年度も、「水を守り、緑を育てひとが生きるまちひの」をテーマに①緑と清流ポスターの展示、②ミニ水族館、③日野用水クリーンデーを行ったので、それぞれの活動報告を致します。

① 緑と清流ポスターの展示

緑と清流ポスターは、市内の小・中学校の生徒たちが日野市の水と緑をテーマに描いた、環境に関する啓発ポスターです。描いていただいた



緑と清流ポスター展示の様子

ポスターは、市役所本庁舎の一階にて、掲示しました。掲示期間はそれぞれ、小学生の部10月2日～10月11日、中学生の部10月15日～10月25日です。今年も多くの方にご覧いただきました。日野市の環境を守っていききたいという小・中学生の思いが、それぞれの作品にあらわれており、展示スペースを彩っていました。

② ミニ水族館

市内を流れる用水に生息する水生生物を、市役所本庁舎一階に展示しました。水槽の中には、カマツカヤタモロコといった川魚を中心に、サワガニ等の普段あまり観ることのできない生物も展示していました。

こちらも緑と清流ポスター同様、来庁した多くの方々にご覧いただき



ミニ水族館

きました。特に、子どもたちが水槽にくぎ付けになっていた印象が強く残りました。ミニ水族館をきっかけに市内を流れる川や用水の生き物に対して興味を抱いてもらえたら幸いです。

③ 日野用水クリーンデー

10月20日(日)

例年、環境月間の催しの一つとして行っている日野用水クリーンデーを今年度も実施しました。当日は多くの市民の方々にご参加、ご協力いただき、水路の草刈りや藻狩りをはじめ、ごみ拾い等水路の清掃活動を行いました。



日野用水クリーンデーの様子



市内の用水は全長で116kmあるとされており、それらは行政と市民の協働によって守られています。日野用水クリーンデーに参加していただいた皆様、本当にありがとうございました。またこのような機会がありましたら、是非ご参加ください。

浅川潤徳水辺の楽校

浅川で遊ぼう5

「バッタ取りと植物観察」

9月14日(土)

例年9月に行っているこの催しは、ふれあい橋や高幡橋の付近の草地で潤徳小学校の子どもたちが虫取りをするというものです。取った虫を観察したり、専門家の方に詳しく解説していただいたりと、子どもたちにとっては虫に対して



興味をもつ良い機会となったことと思います。今年もバッタやチョウなど多くの虫を観察することができました。

スタッフを募集しています

浅川潤徳水辺の楽校推進協議会は近年、長い活動の中でスタッフの高齢化という問題を抱えています。そのため協議会では、水辺の楽校の活動を一緒に手伝ってくださるスタッフを随時募集しています。現在活動をしてくださっているのは、潤徳小学校に関りがある方々が多いですが、子どもたちと遊ぶことが好きだったり、水辺に関わる活動に興味があるといった方でも大歓迎です。詳しく知りたいという方がいましたら、緑と清流課までお問い合わせください。

お問い合わせ先

緑と清流課 水路清流係
042151418309

台風19号が日野市に上陸しました

10月12日(土)、全国的に猛威を振った台風19号が日野市内にも上陸しました。あれから3ヵ月ほど経過しましたが、皆様においては深く印象に残っていることと思います。当時、台風圏内では、JRの運行も全面的に計画運休となる等、全国的に大きな被害をもたらしました。市内でも、浅川・多摩川共に水位が激しく上昇し、川へ排水するための樋門から、逆流して川の水が流れ込んできてしまう等、想定外の事態が多々起こりました。

台風上陸中、緑と清流課では、市の管理地である水路の氾濫を防ぐための調整や、緑地等の安全確認を行うため、常に巡回体制でした。また、台風が過ぎ去った後も、一部取水が難しくなっている水門の復旧作業や、用水路の巡回等を行い、原状回復に向けての対応を行いました。



10月12日 ふれあい橋付近の様子

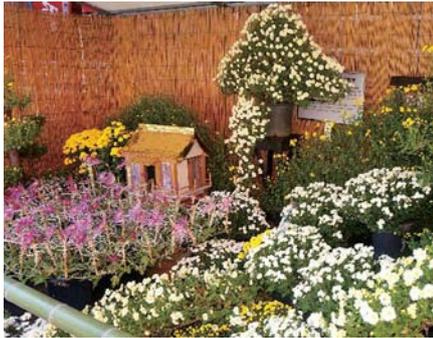


10月17日 ふれあい橋付近の様子



昨年の菊花展は、令和になって初めてです。そして、日々菊づくりに精を出し、観る人を喜ばせ続けてきた日野市菊友会創立50周年という、記念すべき年の展示になりました。高幡不動尊菊まつりでは、『菊の三重塔』をバックに、七五三の記念写真を撮るほほえましい光景が見られました。緑と清流課では毎年日野市菊友会副会長の志村進一さん（写真左）と共に、趣向を凝らした展示を行っています。

令和初の 菊花展



染めて『護摩焚き』を模す手の込みよう。毎年楽しみにしてくださる観客の声を励みに、今年も頑張ります。

昨年は、不動堂前のテント内に手作りの『ミニ不動堂』を、背後に富士山や滝を象った菊を置き、周辺を雲海のよう菊で包み込みました（写真左）。金色屋根のお堂には『本物』の不動明王像や仁王像の写真を配置。真綿を赤く



ツバメの多いまち 日野

春には少し早いのですがツバメの話です。年が明け2、3か月すると越冬地の東南アジアからツバメたちが日本に帰って来ます。昨年、中央線の豊田駅には3月26日に初めて姿を現しました。ツバメは“春告げ鳥”として親しまれてきました。

飛ぶ虫だけをエサにするツバメは水辺・水田の鳥です。稲の害虫を捕ってくれるツバメは昔からありがたい鳥として、日本人は大事にしてきました。そのためツバメは天敵の少ない人のそばで安心して子育てをするようになったのです。

日野には「恩返しをしたつばめ」という昔話が万願寺に残っているそうです。家人の命を助けた恩人としてツバメを慈しむ話です。

この伝統は今の日野に引き継がれています。昨春、広報「ひの」の表紙を豊田駅のツバメが飾りました。表紙に「ツバメが選ぶまち」とあります。

日野はツバメの多いまちです。これは多摩川、浅川、用水などの水辺があり、雑木林などの緑

地が多いことでエサの虫に困らない、さらにまちの人々がツバメに優しいためだと紹介されました。いつまでもツバメに選ばれる優しいまちでありたいものです。



金子 凱彦（日野の自然を守る会）





桑ハウスの改修工事を進めています

令和元年11月9日10日の産業まつりで桑ハウスのPRイベントとして「桑ハウスクイズ」を開催いたしました。

仲田の森蚕糸公園に桑ハウスがあることは知っているても、どんな建物なのか、今、何の工事をしているのか、なかなか知る機会がないと思います。

今回、クイズを通して桑ハウスを知ってもらおう、ということでRPイベントを開催しました。産業まつりの二日間で子どもから大人まで、およそ300人の方がクイズに挑戦しました。桑ハウスの紹介パネルからクイズの答えを探して、ほとんどの方が全問正解することができました！クイズを通して桑ハウスのことを知ることが出来たのではないのでしょうか？

紹介パネルは改修工事中の桑ハウスの周りに掲示しておりますので、公園に遊びに来た際にはぜひ見てみて下さい。今しか見ることのできない、工事中の桑ハウスの姿も載っています。



●落川公園 (街区公園143)

所在地：落川2012 / 面積：2,747㎡ / 開園日：平成15年8月1日

日野市落川が落川村と称された時代、家数35軒の集落が上落川と下落川に二分され点在していました。生業は主として水田農業を営み、養蚕業を副業としてきました。

落川とは、浅川の流れが多摩川に合流することからこの名が付けられたそうです。この合流点付近の地名は油面といい、川の面が油を流したように見えたためその名が付けられたからです。(別説 寺の燈明の油を上納するため、年貢米を免除されたので油免という。)

かつて多摩川は、鮎の漁場として解禁時には賑わい、筏流しや渡し船が盛んでした。「長閑さや船頭一人客一人」、

大正時代の合流点近くの句です。

大正14年には玉

南鉄道(現在の京

王線)が敷設され、

昭和初期に川崎街

道が改修されまし

た。この公園の近

くには、蔵屋敷と

いう地名があり、

かつて村が繁昌し

ていたことが偲ば

れます。この他に、

江戸期から明治初

期の諸法度や布告

文を掲げた制札場

(高札場)跡(市

史跡に指定)や落川遺跡公園

等があります。

●田中島公園 (街区公園176)

所在地：落川1397-61 / 面積：603㎡ / 開園日：平成18年3月31日

浅川と多摩川の合流点に位置するこのあたりは地名を落川といい、浅川が多摩川へ流れ落ちることに由来します。江戸時代から用水が縦横に走り、水田が広がる一方、川欠



(C) 2017 PASCO CORPORATION.
(C) 2017 INCREMENT P CORPORATION.
いかなる形式においても著作権者に無断でこの地図の全部または一部を複製し、利用することを固く禁じます。

けや、洪水に見舞われる地域でもありました。

この公園の南西には田中島という少し高い場所があり、数軒の民家がありました。その中の一軒には小舟が常備されており、明治43(1910)年の大洪水ではその舟で近くの寺に避難したといわれています。この公園のあたりの字名の元屋敷は、水害などにより地形が変遷する当時の事情を物語っています。



水辺のある風景 日野50選
選ばれた水辺を紹介します

45 程久保川遊歩道とワンド

程久保川は七生丘陵に刻まれた谷を源流とする一級河川です。谷戸田を潤しつつ蛇行して流れていましたが、昭和40年代、洪水対策のためコンクリート護岸に改修されました。このとき川は直線化され、堤防が高くなり、子どもたちが降りて遊ぶことが難しくなりました。そのかわり川沿いには、市民の要望を受けて土の地面も含む長い遊歩道が整備されました。雑木



程久保川に繁茂するシャクチリソバ

林の樹種やサクラなどが植栽され、季節を感じる散歩道として市民に親しまれています。遊歩道を歩いていると、程久保川の所々にミゾソバ(牛革草)の群生地を見る事ができます。ミゾソバ(牛革草)は、新選組副長・土方歳三の生家が製造・販売していた石田散薬の原料です。最近、このミゾソバの群生地外来種のシャクチリソバが侵入してきており、今後も注視していきたいところです。

一方、多摩川との合流点には、市民提案により、人工的にワンド(緩やかに蛇行する小川)がつくられました。護岸に穴を開けて程久保川からの流れを取り込んだものですが、当時としては前例のなかった「一級河川の堤防に穴をあける」という仕事を、市民と行政が尽力して実現させたのです。この取り組みにより、程久保川ワンドには豊かな生態系が形成され、小川には多くの魚が、周辺には豊かな植生とそれを利用する小動物や鳥などが見られました。しかしながら、2019年10月に日本



台風19号通過後の程久保川ワンド

列島に甚大な被害を与えた台風19号により、ワンドも土砂をかぶり、植物はなぎ倒され流れも途中で止まっている状態です。この自然豊かな場所をこれからも大切にしていきたいために、行政と市民が力を合わせて手を入れていく必要性を感じます。

46 落川公園―水に囲まれた公園

落川公園は土地区画整理事業でつくられた生きものに配慮した公園です。程久保川から取水した落川用水を公園の外周に回し、水辺に近づきやすくし、ザリガニ捕りや水遊びが楽しめます。休日には見通しのよい

芝生の広場は親子連れでにぎわっています。公園の北側には落川の貴重な田んぼもあります。脇には一の宮用水が流れています。脇には一の宮用水が流れていますが、一の宮用水は程久保川からポンプアップでくみ上げ、ここで落川用水と合流し、多摩市の田んぼまで流れています。公園の上流は民家の間を流れているので一般に知られていませんが、素堀りの用水で小魚の多いところです。ザリガニ捕りの名人の子どもたちには穴場のような場所です。また、ここで暮らしているカルガモもおり、他にもアオサギやコサギ、セグロセキレイ等の野鳥もよく見られます。



落川公園と用水



キジバト…冬でもペアや親子が見られる

〈都市化の先駆者〉

2017年に書いた「変な鳥？ハトの不思議」ではドバト（外来種カラバト）を例に、ハトの仲間は鳥の世界では変わり者で、子育てでも植物の種子を餌とし、下を向いたまま水を飲むことができるなどを紹介しました。在来種であるキジバトは、茶色の色彩がキジの雌に似ていることがその名の由来とされますが、かつて「やまばと」とも呼ばれていました。中西悟堂（日本野鳥の会の創設者）が1938年（昭和13年）に著した『野鳥ガイド』は、身近な鳥としてスズメやムクドリを「村落



キジバト(成鳥)の日光浴：ハトの仲間は、日向で翼や尾を広げる行動がしばしば観察され、日光浴と思われる。

の鳥」として最初に紹介しています。キジバトは後半の「森林の鳥」で登場します。ヒヨドリの都市化は1960年代とされますが、キジバトの場合はそれ以前で、野鳥の都市化では先駆者と言えるでしょう。

〈鴛鴦夫婦？〉

欧米にはオシドリはいないので、英語では2羽のキジバトが「鴛鴦夫婦」を意味するそうです。それはキジバト（ヨーロッパで普通に見られるのはコキジバトという近縁種）が、一年を通してペアで見られるからと思われる。野生の鳥類は生存率が低いので、ペアやファミリーという

関係は春から夏の繁殖期だけというのが普通です。小鳥の雄は毎年春に歌いだし、雄が雌に選ばれるとペアとなりませんが、夏までに子育てを終えて関係性も終わります。小鳥の繁殖には餌として虫が欠かせないので秋冬は子育てしないし、ペアにもなりません。季節を問わずタネさえあれば繁殖できるハトの仲間は、1年中、ペアやファミリーを見かけることができます。

〈親子を探そう〉

キジバトは雌雄の姿は似ていますが、低い声で「デデッポッポー」と鳴くのは雄だけで、小鳥のさえずりと同じように「雌を呼ぶ」「縄張りを宣言する」という意味があると考えられています。また、巣作りの際は、枝をくわえて運ぶのは雄で、木の茂みで待機していて枝を組むのは雌のようです。

雌が2卵を産むと抱卵し、半月程度で孵化。その後、およそ半月程度で巣立ちに至ります。巣内では小さかったひ



キジバトの幼鳥：成鳥は首に横縞の模様があるが、幼鳥の首には模様がないか、あっても淡い。

なも巣立ち後、数日もしないうちに親鳥と同じサイズになるので、親子は大きさでは区別できなくなります。そこで左右の襟のあたりにある縞模様に注目してみましょう。この縞模様がないか、あっても淡いのが若い証です。2羽でいるキジバトはペアでしょうが、3羽でいたら親子かも知れません。ひなが2羽とも育つことは少ないので、4羽でいたら2ペアかも知れませんが、4羽中の2羽の縞模様が淡ければお父さん、お母さんと子供が2羽のファミリーのはずです。

あとがき

季節も冬となり、寒い日々が続いています。皆様におかれましては、ますます健康管理に気を遣っていることと思います。率直に申しますと、私は冬の寒さが好きではありません。毎朝布団に包まりながら、冬なんて来なければなあと考えたりもします。ですがその反面で、冬の景観はとも好きです。毎年雪がかった冬景色が観られることを楽しみにしています。

さて、清流ニュースにおいて長く連載を続けてきた「みどりの翼」ですが、本号をもちまして終了させていただきますこととなりました。毎度執筆していただいた日本野鳥の会の安西様には、緑と清流課一同およびご愛読いただいている読者の方々より深く感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

文 (公財)日本野鳥の会
主席研究員 安西 英明
写真 金子 精一